

北海道政策研究会

道内調査 in 道南 調査報告書

2012年7月9日-11日



南かやべ漁協にて定置網漁を体験乗船

日下 太朗 (団長)
高橋 亨
北口 雄幸
沖田 清志

田村 龍治
稲村 久男
笹田 浩

北海道政策研究会

視察のしおり

日程表 第1日目 7月9日(月)

行き先等	時間	日程等
函館駅	12:00	函館駅集合
昼食		恵比寿屋食堂(井上函館朝市協同組合連合会理事長対応)
太平洋セメント 上磯工場	13:00	太平洋セメント上磯工場を視察(神長俊樹工場長対応)
新幹線 工事現場	15:00	新幹線工事現場視察。万太郎トンネル、戸切地川橋梁、大野新道橋梁 (山崎貴之北斗鉄道建設所長対応)
箱館奉行所	16:40	(沼崎館長対応)
五稜郭タワー	17:00	(庭田部長・木村室長対応)
意見交換会 ホテル着	18:30	工藤函館市長および能登谷函館市議会議長と意見交換および懇談 ホテル法華クラブ(泊)

日程表 第2日目 7月10日(火)

行き先等	時間	日程等
ホテル発	08:00	ホテル発。レンタカーにてフェリーターミナルへ移動
フェリー乗船	09:30	津軽海峡フェリーにて大間町に向かう。11:10着
昼食	11:00	長宝丸(昼食後、タクシーにて大間原発に移動)
大間原発視察	13:00	電源開発・大間原子力発電所視察(浦島所長対応)
フェリー乗船	14:20	フェリーにて函館市に戻る。16:00着。レンタカーで移動
ホテル着	17:30	ホテル函館ひろめ荘(泊)
意見交換会	18:30	中西渡島総合振興局長以下6名と意見交換&懇談

日程表 第3日目 7月11日(水)

行き先等	時間	日程等
ホテル発	04:30	ホテル発。南かやべ漁協定置網漁を体験乗船
意見交換	09:00	鎌田南かやべ漁協組合長と意見交換(TAC問題&計画停電等)
はこだて療育・ 自立支援センター	10:15	はこだて療育・自立支援センターを視察(後藤センター長対応)
函館市国際水産・ 海洋推進センター	11:35	函館市国際水産・海洋推進センターを視察(小野函館市企画部次長・ 本吉企画部国際水産・海洋都市推進室参事対応)
昼食&解散	12:40	滋養軒にて昼食。その後解散

【調査結果報告書】

1 日目 7月9日(月)

太平洋セメント(株)上磯工場

太平洋セメント(株)上磯工場(神長俊樹工場長)は、1890年(明治23年)以来122年の操業の歴史を持ち、年間390万トンのセメントを生産する東日本最大のセメント工場である。

特に近年は、循環型社会をめざして、環境に配慮した取り組みを積極的に進め、原料代替として廃棄物を再利用、天然資源である粘土の代わりに石炭灰、建設発生土などを使用し、このほかにも下水道汚泥、都市ゴミ焼却灰、ガラス屑等の各種廃棄物を受け入れている。補助燃料としては、廃タイヤ、廃車シュレッダーダスト、肉骨粉等も利用し、サーマルリサイクルを行っている。

また、セメント製造過程で発生した余熱を再利用し「廃熱発電設備」を設け、自家発電設備と併せ、工場で使用する電力の95%をまかなっている。



北海道新幹線のトンネルと橋梁現場

北海道新幹線の北海道側の工事現場では、2015年(平成27年)の開業をめざし、急ピッチで工事が進められている。

今日は、その工事の中から、万太郎トンネル(520m)、戸切地川橋梁(158m)、大野新道橋梁(50m)の3カ所を視察した。

万太郎トンネルでは、現在、覆工コンクリート工事の最中で、開業1年前の2014年(平成26年)に試運転できるよう工事を進められていた。

戸切地川を横断する橋梁は、PC片持ち箱桁橋の工事を行い、橋梁基礎はニューマチックケーソン工法により構築しているとのことだ。

それぞれの現場では、3年後の開通を目指し急ピッチで工事が進められており、完成間近のトンネルや橋梁を視察し、改めて北海道新幹線の開通が待ち遠しいと感じ、新幹線を通じて北海道経済が元気になればと期待が膨らんだところだ。



箱館奉行所および五稜郭タワー

今日の視察の最後は、箱館奉行所と五稜郭タワーを見せていただいた。

箱館奉行所は、1857年(安政4年)から五稜郭の工事が始まり、7年後の1864年(元治元年)に役所などの建築物が完成し、奉行所としての業務が始まっている。

大政奉還により新政府にその業務が引き継がれ、箱館戦争後の1871年(明治4年)にはほとんどの建物が解体され、公園として市民に開放されていた。

函館市では、1985年(昭和60年)から発掘調査を始め、古い写真や文献資料、古い図面などから奉行所復元の検討を始め、2006年(平成18年)から復元工事が始まり、2010年(平成22年)に完成し、箱館奉行所が再現された。

その建築には、資料に基づき忠実に再現し、宮大工や瓦職人など、全国から職人を集めて造られ、極めて貴重な遺産となっている。



2日目 7月10日(火)

大間原子力発電所建設現場

大間原子力発電所は、電源開発株式会社(J-POWER)が建設を進め、使用済核燃料を再処理して得られるプルトニウムを全ての炉心に使用する世界初の商業炉フルMOX原子力発電所で、2008年(平成20年)5月に着工し、2014年(平成26年)11月の完成をめざし、工事が進められている。(現在は工事を中断し、完成時期は未定との説明を受けた)

しかし、昨年3月11日の東日本大震災及び東電の福島原発の事故を受け、原子力発電のあり方が大きく問われることになり、37.6%の進捗率で工事は中断している。現在の建設状況は、原子炉建屋及びタービン建屋が建設中であり、中断が長期化することによる鉄筋などの腐食防止のため、シートで覆うなどの対策をとっている。

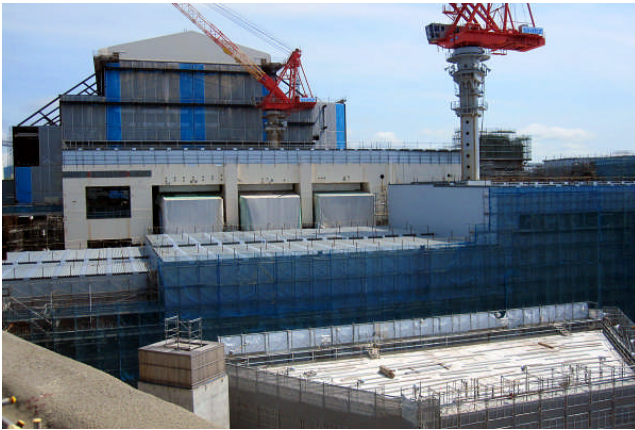
大間原発の建設場所は、フェリーターミナルから直線で約1.8kmの距離にあり、1,000トンを超える巨大クレーンが目に入り、建設現場からも函館山が確認でき、改めてその近さを実感したものだ。また、原子炉や発電タービンを冷却する水には海水を使用し、毎秒91トンの温水が海水に排水され、水産物への影響なども気になったところだ。

いずれにしても、福島原発の事故を受け、エネルギーのあり方や再生可能エネルギーの普及などにつ



いてしっかり議論し、フルMOX燃料を使う大間原発の必要性などについても議論していきたい。

また、従来はなかなか視察に応じてもらえなかったJ-POWERであったが、今回は視察を受け入れていただき、施設の概要や求められる安全対策への説明に対応していただいたことには感謝したい。



3日目 7月11日(水)

南かやべ漁協定置網漁を視察

朝4時に起床し、南かやべ漁協定置網部会長・野村水産社長の定置網漁船にて、南茅部沖に設置してある現場での網起こしを視察した。

南茅部は本道定置網(大謀網)漁発祥の地として、現在も昆布漁と共に地域漁業の大きな柱となっている。春に沖合1,000m~3,000m、水深40m~70付近に設置された定置網は全部で19ヶ統。今年は、クロマグロの豊漁が続き、例年のほぼ2倍の水揚げ量は実に20~30年ぶりとなるようで、浜も活気づいている。

この日も、私たちが乗船した船には中型2匹、小型5匹のクロマグロがあがった。この他に、イカ、イワシ、アンコウ、カレイなどがあがったが、野村社長の話では漁は少ないとのことだ。

あがったマグロは、船上で大振りのハンマーで頭を叩き、失神させて鮮度を保つようであり中型のクロマグロは内蔵を抜き、頭部からワイヤーを差し入れ、神経を殺して品質を保持するのだそうだ。船上はマグロの血で赤くなり、リアルな光景。しかし貴重な光景を視察させてもらった。今年の豊漁の原因は、水温が昨年よりも高くなったことで、餌となるカタクチイワシやマイカを追ってきたらしいとのことだ。

北海道漁業の中核を担う定置網の現場で、漁師の生の言葉を聞き、私たちが貴重な経験を通し、水産業の厳しさと大切さを実感したところだ。



南かやべ漁協との意見交換

南かやべ漁協鎌田組合長、小川専務、中村常務を交えて、浜の課題等について意見交換を行った。

特に、鎌田組合長からはスケトウ鱈の漁獲可能量（TAC）について、現場と国の水産審議会の意見に乖離があるとの指摘で、「有識者（学者）の机上の計算ではなく浜の実情を見て対処してほしい。浜では網の減反、休業日の努力をしているが、死活問題にも発展している。国や道の役所の考えで物事を決めて欲しくない。資源は減ってはいないので、現在は4万6千トンのワクだが、6万トン是非とも確保してほしい」との意見をいただいた。

そのほかの課題としては、「計画停電が実施されると、昆布の乾燥に影響が出る。南かやべ漁協では天日干しではなく機械乾燥を行っている。この機械乾燥は、昆布の色にムラが出来ずに高品質の昆布を生産するカギとなっている。昆布漁の最盛期は8月であり、計画停電は昆布漁家の収入に大きく影響を及ぼすので、何とかして避ける努力をして欲しい。」との切実な意見も出された。

TACについては、概算要求時に強く要請するとともに、計画停電は道や北電にも強く申し入れることを約束して意見交換会を終了した。



函館市療育・自立支援センター

今までの知的障害や肢体不自由児の施設が老朽化し、建て替えが必要になったことから市内の3施設を統合して新しい施設として建設、今年度開設した施設で、児童に関わる知的・身体の療育・自立支援と、大人の自立支援（B型就労支援、生活訓練）が一つの施設で行われている。

発達障害や肢体不自由児の専門医として小児科医、精神科医、整形外科医も常勤しており、センター内だけでなく外来も受付ていることから、通園以外の在宅療育・リハビリテーションにも役立っている。また、常勤の精神科医を確保できたことで、利用者の待機期間の短縮に役立ったという。

乳幼児期、学齢期、成人期に至るライフステージに応じたトータルな支援体制を構築し、情報提供機能、地域交流機能、保護者支援機能（とりわけ母親のメンタル支援）も兼ね備えた施設として、今後も複合的な発展が期待できる施設として存在してほしいと思った。



函館市国際水産・海洋推進センター

函館市は、2004年（平成16年）函館市の未来構想として「国際水産・海洋都市構想」を策定、その後、（財）国際水産海洋都市推進機構が設置されて、企業の研究機関の誘致や新しい商品の開発など函館マリン・バイオ・クラスターとして着実に歩みを進め、その集大成として「はこだてどつく」跡地を利用した「国際水産・海洋総合研究センター」を本年度着工、2014年（平成26年度）の完成を目指して設計・建設を急いでいる。



函館市は、イタリアのナポリ、アメリカの東海岸にあるウッズホールに匹敵する水産・海洋総合研究都市を目指すこととしていたが、昨年、道経連が提唱し、道も支援をする「北海道フードコンプレックス構想」が、国の募集した「国際戦略総合特区」に指定され、函館市が水産物の付加価値向上研究開発拠点として、北海道のフード特区エリアを構成する地域となったことから、これまでの取り組みとリンクさせ、庁内に推進体制を整備していくことになった。

函館どつく跡の現地は、北海道南西沖地震の液状化被害となった護岸の工事が、既に国交省の事業として先行して行われており、2年後には10haの広大な土地に試験・研究棟が現れることになる。

北大水産学部を初め、国内の水産関係者、国際的な研究者や学者が集い、まさしく、ナポリやウッズホールのような都市を目指し、併せて、海洋エネルギー開発も視野に入れた拠点となることを期待したい。

【メモ】